

8月4、5日 大分大会特集①

Newspaper In Education

富士見が丘幼稚園(大分市)



教育への新聞活用を促す第21回N I E全国大会大分大会が8月4、5の両日、大分市のホルトホール大分などで開かれる。スローガンは「新聞でわくわく 社会と向き合うN I E」。新聞と出会う幼稚園から、社会とつながる大学まで、発達段階に応じた県内の実践例を報告する。

取り組みの狙い

活字楽しむ素地養う

今永 真由美教諭(31)

以前から新聞を使った遊びは取り入れていたが、N I Eの取り組みを始めてからは教師の新聞に対する見方が変わってきた。単に丸めたり、ちぎったりする遊びだけでなく、記事の内容にも目を向けて子どもの興味を引き出す話題を探すようになった。マイ新聞作りの後は保護者から「新聞の見方が変わり親子の会話が増えた」「新聞を読む大切さを感じた」との声が寄せられた。家庭でも子どもの興味を引き出すきっかけにしたい。

遠足の前に天気予報の記事をみんなで見たら、次の日から子どもたちが自分で新聞を開いて天気予報を見るようになった。毎日同じページに、同じことを扱った記事が載っていて幼稚園児も見つけやすいのが新聞の魅力。園児は遊びを通していろんなことを学ぶ。この時期に新聞を使って遊ぶことで、将来新聞を読み、活字を楽しむような人になる素地を養いたい。



「子どもの興味を引き出すきっかけに」と話す今永教諭

お気に入り「できた!」



興味のある記事を探す園児たち

「浅田真央ちゃんすてき」「動物園に行きたいね」。昨年12月、大分市の富士見が丘幼稚園の教室で年長組の親子が楽しそうに新聞記事を眺めていた。お気に入りの記事を切り取って「マイ(わが家)新聞」を作る活動。プロスポーツ選手の活躍や高崎山のサル個体調査、竹灯籠イベントを伝える記事の他、天気予報や広告記事を集める親子など興味はさまざま。余白に感想を書き込んでオリジナル新聞を作り上げた。

親子は家庭で3日間、新聞を一緒に読み、切り取る記事を探した。渚野二三世園長は「親子で興味を引く記事を探すことで、互いの好きなことや気になることを語り合う。親子の絆やコミュニケーションを深めるのが狙い」と話す。園では昨年夏から、幼稚園として珍らしいN I Eの取り組みを本格的に始めた。園児は文字が読めなくても、写真やグラフ、表を見

年齢に応じて新聞活用

て情報を読み取ることができるよう。もともと新聞紙は工作などに使うため、園での遊びになくはならないものだった。N I Eの取り組みを始めてからは、年齢別に身に付けさせたい力に応じて、効果的に新聞を活用している。

例えば年少組は「新聞の素材を知る」ことが目標。大きな新聞紙に隠れたり飛び込んだり、かぶってお化けになったりすることで新聞紙の形の変化を楽しんだ。年中組は忍者になりきって新聞紙を破ってみたり、体に当てて落とさないように走ってみたりして、縦向きに破れやすいという新聞紙の性質を知り、風の抵抗力を体感した。年長組になると、素材を生かして遊べるようになる。「自分の服を作ってみよう」という活動では、



マイ新聞作りに挑戦する園児と保護者たち

紙をちぎったりリボンなどの飾りを付けたりして思い思いの服を作った互いに見せ合った。普段から園児が自由に手に取ることができるよう、教室の教材棚には新聞がある。年長組の教室の前にはその日の新聞専用のポストを設置。園児は取り出して読んだ後、次の人のために元に戻すようになり、自然とその日の新聞と古新聞との違いを理解したという。渚野園長は「子どもの『何て書いているの?』の問いに教師や親が応えて、興味や関心を引き出すことが大切」と強調。「子どもはいろんな可能性を秘めている。将来いろんな物の見方を身に付けることにつながっていく」と話した。

(渡辺美加)

リレーエッセー実践から

「えぬ、あい、いーって何?」そこからスタートして3年がたった。必然的に? 強制的に? 毎朝、新聞をめくるのが日課になった。スポーツ記事や大きな出来事に目が行きがちだが、地域の話や投稿、コラムなど情報量の豊富さにあらためて気付く。また、普段いかに多くの情報を見過(こ)して生活しているかということにも気付かされる。

自分流に楽しもう

若杉 健志



具体的な実践では、家庭ごみ有料化、車いすマラソンなど地域を扱う場合の教材として記事は非常に有効だった。環太平洋連携協定(TPP)、震災復興など世の中の動向を扱う場合にも資料として役立った。時には牛喰い絶叫大会の記事から「自分なら何て叫ぶ?」と問い掛け、校舎の3階からみんなで叫んだ

「授業で使えるかもしれない」「子どもたちと考えたいな」「すぐにスクラップが山積みになる。新聞は情報の宝庫である。しかし、見つけた記事が常に授業で使えるわけではない。記事にも賞味期限がある。使わずに新鮮さを失ってしまう記事の方が多いだろう。」

「記事を探す切り口はさまざま。『N I Eは絶対こうあらねばならない』という型はないと思う。自分流に楽しんで実践していく方がきっとと長続きする。これからの子どもたちと一緒に社会の出来事に関心を持ちながら、肩肘張らずに実践していきたい。(大分市舞鶴小学校教諭)」



切り抜き新聞コンクールに向けて記事選びをする舞鶴小5年生

親子の感想

貴重だった記事を探す時間

▽利光夏子さん(38)、愛理ちゃん(6) スケートの浅田真央、羽生結弦両選手の記事を切り抜いた。愛理ちゃんは「頑張っているからお弁当を食べさせてあげたい」と両選手の横にお弁当の写真をつけた。夏子さんは「二人でじっくり新聞を開いて記事を探すのは貴重な時間だった。『これは何?』と次々に聞かれるので親としても勉強になった」と話した。



大人と違う視点で興味持つ

▽波多野尚美さん(34)、瑛太ちゃん(6) マイ新聞の中央に、乗用車が川に転落した事故の記事を配置。消防士の父親の仕事に興味津々の瑛太ちゃんが「カッコいい」と選んだ。尚美さんは「お父さんの仕事に興味を持っていたうれしかった。年長に新聞は難しいかと思ったが、写真を見て大人とは違う視点でたくさん切り取る記事を見つけていた」と感想。

